

D.C. グリーンの『Tenrikyō』（3）

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回（本誌10月号）に引き続き、今回は『The Japan Weekly Mail』1895年6月1日号に掲載されたグリーン氏の天理教に関する論文『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』（天理教一天の理の教え）についての記事を見ていきたい。この記事は、同年5月22日の午後4時から東京の築地で開催された日本アジア協会の例会において、同論文に関してグリーン氏が行った2回目の発表の内容をまとめたものである。以下、抄訳する。

グリーン氏はまず、天理教の原典の一つ「みかぐらうた」を聖歌（the hymns）と称して次のように説明した。この聖歌は聖典の中で唯一印刷されているものであり、その点からしても大変興味深い。これらは「神楽歌」と呼ばれたり、12の歌があることから単に「十二聖歌」とも呼ばれたりする。修辭表現はほとんどみられず、言葉は洗練されていない。また、リズムにもほとんど工夫はみられないため、韻律的な解釈はできない。しかし、節や句にはある種の調和が見られ、ヘブライ語の詩編（the Hebrew Psalms）の対句法を思い起こさせる。ただし、似ているのは単に外形だけである。これらの聖歌の言葉は平易であるが、その多くはそのままではほとんど理解できない。しかし、そこには何かしら感銘を与えるような崇高な思想があるように思われる。

そして、グリーン氏は自身で行った聖歌の試訳をいくつか読み上げた後、天理教の教義の説明へと移り、まず神道など他の教えとの関係において次のように説明した。教祖みきの教えは、心学や鳩翁道話と同様に、広く民間に流布している道教に負うところが多い。また彼女は万物には男性と女性の原理が具現化されているとする中国哲学の真理と両部神道と呼ばれる神道の一般的真理を踏襲している。彼女には、新しい一派を始めよう、あるいは伝統的な教えと対立しようという意図がないことは明らかであった。単にこれまで流布している信仰に新たな教えを加えようとしただけであった。

続いて、天理教の神についての説明を行った。教祖みきの教義体系の中心に10柱の神がおかれている一方で、礼拝ではテンリ・オー・ノ・ミコトという語句が絶えず繰り返され、人間が忠誠を尽すべき真の対象は月と太陽であるとみきは主張している。彼女の説教における教訓的かつ勧告的な部分では、ほぼ「月日」（月と太陽）という言葉のみが使われているが、これは、マクス・ミュラーが単一神教（henotheism）と呼んでいるものに、中国哲学と矛盾しない範囲で非常に近づいていたことを示している。実質的に彼女は、自然界において月と太陽また天と地を象徴する、そして人間社会においては夫と妻の関係を象徴するこの2神のみを信じていたように見受けられる。これらの神々は人格的属性を有しており、それゆえ人間の心を揺さぶるあらゆる感情を感じることができるのである。彼女は折に触れこれら2神は共にすべてのものの根源（the great First Cause）であると主張していた。しかし、彼女に哲学の知識があったわけではなく、管見の限りにおいては、その二神論は未完成かつ未熟であり、彼女の教えに見

られる一神論（monotheism）的傾向を妨げるものではなかった。このことはのちに、信者たちの説教のなかでより明白になっていった。

グリーン氏はこのように、天理教は多神教なのか一神教なのか、あるいはその教えを二神論から理解すべきなのかと議論をした後、教祖みきの教えにおいて興味深い点はほかにもあるとして、神と人間の関係、そして病気治癒について次のように説明した。天理教の教えのなかで特筆すべきは、神々と人間は親子の関係にあるというみきの教えであった。人間は神々の子供であり、親を慕い、とくに苦悩や病気からの救済を求めている。そしてここから信仰治癒の教えが生まれてきたのである。最初、みきは病気の平癒には医者も薬も必要ないと説いていた。しかし、世論の圧力によって徐々にこの点は説示されないようになり、医者や薬にたすけを求める信仰は、奨励されないまでも許されるようになった。また、最初に神がこの世に現れた際にカミオロシが果たした役割という点からすると、現在この教団のなかでそれが実践されている様子がほとんどみられないのは大変奇妙なことに思われる。おそらく、これもまた世論への譲歩であろう。さらに、みきは神の愛（the divine love）を説くにあたって、この愛というものを決していい加減にうけとめてはいけないこと、そしていかなる宗教的儀礼や行いにおいても心の浄化なしではご利益がないことを人々へ強く戒めていた。

グリーン氏は次に、人間は皆兄弟であるという教えについて解説し、そのうえで教祖の未来観についても言及した。神々は人類の親であるという教えは、必然的に人類の兄弟性（the brotherhood of man）を導き出す。しかし、この教えはみきよりも、むしろのちに説教者たちによって強調されるようになった。彼らの説くところによれば、天皇は一番年上の兄、一家の長であり、そして人類の親である神々の特別な代表者なのである。そして、これは教えの普遍性を主張することへと繋がっていった。日本人は神々の直系であり、親である神により近い存在であり、世界中のすべての人間は最終的に偉大なる親の存在を知り、大和の社に集まるのである。みきは未来に関しては明言しておらず、将来的に現れてくる恩恵や罪といった状況についてあいまいに述べるに留まっていた。また彼女は、転生理論の真理（the truth of the theory of transmigration）についても述べているが、この理論によって現生における各個人の責任の意識が弱まることのないように注意を喚起している。

以上が、『The Japan Weekly Mail』1895年6月1日号に掲載されたグリーン氏の天理教論文『Tenrikyō』についての報告記事の前半部分である。ここでは、「みかぐらうた」の自身の試訳が紹介されたり、また天理教の神や、神と人間の関係などについて解説されたりしており、天理教の教えの根幹に対するグリーン氏の理解の一端が明らかになっている。次回では、礼拝や布教活動など天理教の信仰実践について発表している同記事の後半部分について見ていくことにする。